

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12795

研究課題名（和文）教育実習日誌を利用した教員志望学生の主体的実践省察の熟達化の解明と支援開発

研究課題名（英文）Clarification and Support Development of Proficiency in Self-reliant Reflection of Pre-service Teachers Using Teacher Training Journals

研究代表者

市川 洋子 (Ichikawa, Yoko)

千葉工業大学・創造工学部・助教

研究者番号：70406651

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教育実習中に活用される実習日誌に対する教員志望学生の作成活用の実態を検討し、その後の実践省察でも日誌を作成利用しようとする意欲（日誌継続意欲）に影響を与える要因を探索的に検討した。その結果、日誌の意義理解と心理的負担感が影響することが示唆された。さらに、実践記述と考察を書くことの難しさ、そもそも効果的な対処法を思いつけないといった日誌作成上の心理的負担を軽減するため、2つの介入（日誌の再読・生徒逸脱行動を捉える観点の増加）を実施した。その結果、日誌記述や実践考察がより精緻化された。また、多くの観点から生徒の逸脱行動を捉え、効果的な対処行動を見つけ出すことが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、実習日誌に対する書き手自身（教員志望学生）の認識がその後の日誌を利用した実践省察への意欲に影響することを示したことである。具体的には、日誌の意義に対する理解の程度と日誌作成に関わる心理的負担の大きさが、その後の実践省察において日誌を自発的に利用することにつながる可能性を示した。また、社会的意義としては、教員志望学生の抱える日誌に対する心理的負担を減らすための介入方法を開発し、その効果を検証した。今回開発した介入方法を実習事前指導等で実施することで、教育実習の質を高めることに貢献できることが予想される。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the actual situation of making and using journals during educational practice, and the factors that influence the motivation to continue journals even after the practicum. As a result, it was suggested that the understanding of the meaning of writing the journal, and the feeling of psychological burden affected. Furthermore, in order to reduce the psychological burden of writing journal, such as the difficulty of writing practice descriptions and consideration, and the difficulty of coming up with an effective coping method, we did two interventions: rereading journal, and peer work. As a result, the description and reason in the journal were refined. Moreover, it became possible to detect the deviating behavior of students from many viewpoints and to find effective coping behavior.

研究分野：教育心理学

キーワード：教員志望学生 実習日誌 省察

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

教師の成長そして質の高い教育の実現のために日々の教育実践の振り返り(省察)は欠かせないものである。教員養成課程においても教育実習では多くの大学で日誌作成が義務づけられ、教員志望学生の実践に対する省察を促進しようと試みている。

従来の研究では研究者による日誌分析は試みられているものの、書き手自身(教員志望学生)の省察に対する認識は十分に検討されてこなかった。しかし実習生自身の認識に関わるメカニズムが解明されなければ省察のための熟達支援を十分に行うことは不可能である。

### 2. 研究の目的

本研究では教員志望学生の日誌作成・活用方法に着目し、彼ら自身が日誌というツールを使用するなかで、それらの方略の明確化と省察に対する意義認識への効果を経て主体的実践に至るまでのメカニズムの解明と介入実験を行い支援プログラム開発のための知見取得を目的とする。

具体的には以下の4つを目的とする。

- 1) 自発的省察日誌継続意欲に及ぼす要因の探索的検討
- 2) 実習日誌の意義理解、意義実感、自発的省察日誌継続意欲との関連の検討
- 3) 日誌を読み返す介入と日誌記述の量と質に対する効果検証
- 4) 生徒逸脱行動を捉える観点への介入と対処効力感に対する効果検証

### 3. 研究の方法

#### 1) 自発的省察日誌継続意欲に及ぼす要因の探索的検討

教育実習を終えた教員志望学生を対象に日誌の利用状況等をたずねその回答内容を KJ 法により整理した。加えて、その後、実習日誌のような日誌を利用した省察実践を継続したいかといった自発的省察日誌継続意欲に影響する要因を探索的に検討した。具体的には、教育実習を 20xx 年に経験した教員志望学生(33 名)を対象に、次の調査を行った。a) 日誌を利用した実践省察を継続したいといった自発的省察日誌継続意欲について 10 段階(0: 全くそうしたくない~10: 非常にそうしたい)の回答とその回答理由、b) 「実習時に日誌作成にかけた時間(1 日単位)、c) 「実習日誌作成と日誌を読み返すといった活用に対する自己評価(各 100 点満点)とその理由」、d) 「日誌に書いた内容とその理由」「日誌の意義」についての自由記述による回答。記述による回答は KJ 法を参照して分類整理を行った。

#### 2) 実習日誌の意義理解、意義実感、自発的省察日誌継続意欲との関連の検討

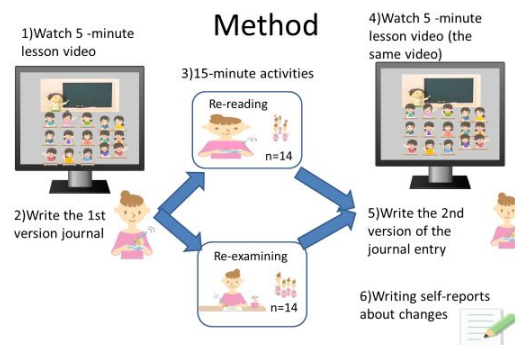
教育実習を 20xx 年に経験した教員志望学生(41 名)を対象に、次の調査を行った。具体的には、教育実習前の指導等によって実習日誌作成活用の意義をどの程度理解していたかについて(実習日誌の意義理解)としては「実習日誌は、教師として成長するのに役立つ」といった質問に対して、1: 全くそう思わない~10: とてもそう思うの 10 段階で回答を求めた。また実習体験中に実感した日誌作成活用の意義(「意義実感」としては「実習中、日誌を作成活用することは、教師として成長するのに役立った」といった質問に対して、1: 全くそう思わない~10: とてもそう思うの 10 段階で回答を求めた。自発的省察日誌継続意欲については、10 段階(0: 全くそうしたくない~10: 非常にそうしたい)で回答を求めた。また各質問に対する理由についても自由記述による回答を求めた。

#### 3) 日誌を読み返す効果の検討

教育実習を終えた教員志望学生計 28 人を対象に、次のような手順で実験を行った。a) 5 分程度の授業(生徒が調べた内容を発表し、教師が質問やコメントをしている場面)を視聴後、その教師になったつもりでその授業について日誌を作成。b) 教員志望学生を 2 つの群にわけ、作成した日誌をひたすら読み返す(Re-reading 群)または日誌を読み返して再度その根拠や理由を説明する(Re-examining 群)ことを 15 分間実施。c) 再度、5 分程度の授業(介入前に視聴したものと同一内容)を視聴し日誌を作成。d) 実験に対する感想を提出。そして、日誌に記述された内容を量的質的に分析し、介入効果を検討した。

#### 4) 生徒逸脱行動を捉える観点への介入と対処効力感に対する効果検証

教員志望学生 51 名を対象に、携帯をずっと触っていて授業に全く参加する気がないように見える生徒 A に教師として対面した際に、生徒 A の行動に対処できるそうか(5 段階)をピアワーク前後に回答。プログラムの流れとしては、a) 生徒 A の行動の理由を思いつく限り書き出す(個人作業・箇条書き)、b) ピアワーク: 二人一組で互いの箇条書き内容の紹介をしあいながら、個人で考え付かなかった原因や事情があれば箇条書きにメモ、相手を変えて 3 回実施。c) ピアワークをすべて終了した後、新たに思いついた理由があれば箇条書きで書き出す(個人作業)。教員志望学生が書き出した生徒 A の行動の原因について KJ 法で分類し、ピアワーク前後の変化を



検討した。

#### 4. 研究成果

##### 1) 自発的省察日誌継続意欲に及ぼす要因の探索的検討

教育実習で日誌を利用した教員志望学生 33 名を対象に調査を行い、教師になってからも自発的に日誌利用を継続しようとする意欲を促進または妨害する要因について探索的に検討を行った。自発的省察日誌継続意欲の平均値は 5.39 (SD=2.68)、4 以下の回答をした学生は 33 人中 11 人で一部の学生は教師になってからの省察日誌の継続的利用に対して迷いを感じていた。次に、自発的継続意欲についての回答理由(自由記述)を整理したところ、日誌作成に伴う負担感(18 名/33 名が言及)と、日誌の意義に対する認識(18 名/33 名が言及)がその理由として挙げられ、日誌利用に対する意義の理解度および日誌利用に伴う負担感が日誌継続意欲に影響することが示唆された。

次に、日誌を用いた実践省察の深さと日誌継続意欲との関連について検討した。具体的には「日誌に書いた内容とその理由」「日誌の意義」についての教員志望学生による自由記述回答を整理した。その結果、学生は反省や感じたことといった「主観的内容」と生徒・クラスの様子といった「観察的内容」とを書いていた。さらにそれらの内容は、いつか思い出すためといった「忘備録的利用」、教師と共有して意見やアドバイスをもらうといった「情報提供的利用」、自分で読み返して自己理解を深め改善点を見つけるといった「自律的利用」といった 3 つの使用方法があることがわかった。先行研究に照らし合わせれば「忘備録的利用」「情報提供的利用」は省察の初段階である『描出レベル』、「自律的利用」はその上の『確証レベル』と分類できる。そこで省察レベルによって自発的継続意欲に違いがあるか検討したが有意な違いはみられなかった。比較的深い省察(記録と考察の両方を書く)を行っていた学生であっても、日誌利用の意義が実感できず(具体的には、自分の実践の問題点に対して強いこだわりがある一方で、実際に日誌を書いても効果的な問題解決策を得られていないといった点)さらに日誌作成に対する負担感(言語化に対する戸惑い)を訴えていた学生は日誌継続意欲が低かった。

以上から、教員志望学生が自ら日誌を利用した省察実践を行うには、省察において日誌を用いる意義を学生自身が深く認識し、日誌利用に伴う負担感を減らすことが重要であることが示唆された。

##### 2) 実習日誌の意義理解、意義実感、自発的省察日誌継続意欲との関連の検討

実践省察において日誌を利用することの意義に対して、教職課程の講義等を通してその意義を理解できた程度(日誌意義理解)と、実習中など実際に日誌を利用しその意義を実感した程度(日誌意義実感)に分け、今後の実践省察に日誌を自発的に利用しようとする意欲の高さ(自発的省察日誌継続意欲)との関連を検討した。

その結果、日誌意義理解と日誌意義実感、さらに自発的省察日誌継続意欲と日誌意義理解との間に有意な正の相関関係がみられた。一方で日誌意義実感と自発的省察日誌継続意欲との間には有意な関連はみられなかった(Table 1)。つまり日誌意義を理解して実習に臨んだ学生ほど、実習中に日誌の意義を実感している傾向が示唆された。また日誌の意義を理解していた学生ほど、実習を終えた後も自発的に日誌を作成活用した実践省察を行いたいといった継続意欲が高い傾向がみられた。

しかしながら、少数の学生ではあるものの、日誌の意義を理解していても、実習を終えた後は自身の実践省察に日誌を活用しないと回答していたため、さらにそういった例外的な学生について詳細にその学生の自由記述を検討した。まず、日誌意義理解は非常に高いものの、日誌継続意欲は非常に低い学生を特定した(2 名)。その 2 名の学生はどちらも実習中の意義実感がそれほど高くなかった。彼らの各回答に対する理由(自由記述)を検討すると、日誌の意義を実感できなかった理由として「日誌が

## Results

Table 1. Correlations between the scores for understanding, perception, and motivation (N = 41)

Item	Understanding of the benefit of JW	Perception of the benefit of JW	Motivation to continue JW practice
Understanding of the benefit of JW			
Perception of the benefit of JW	.53**		
Motivation to keep JW practice	.36*	.18	

Note. \*p < .05, \*\*p < .01

## Results

\*Low=1-5, High=6-10

Practicum teacher	Perception of the benefit of JW	Understanding of the benefit of JW	Motivation to continue JW practice	Reasons given (Excerpt)
A	1	10	8	I think JW is beneficial, but during the practicum, I was so scared of the trainer that I didn't write the journal honestly and couldn't perceive the benefit of JW.
B	1	6	7	
C	4 Low*	8 High	9 High	Although I didn't perceive the benefit of JW because I was not good at writing, by continuing with it I think I can develop the ability of writing.
D	5	7	2	I think JW is beneficial, but I am not good at writing and I need too much time to write in the journal, which might make it difficult for me to keep up with the practice.
E	4 Low	7 High	3 Low	

実践を改善する手立てとして有効なのは理解しているが、書くことが苦手で、あまりにも時間がかかりすぎる」ことを挙げており、その結果として「日誌継続は無理」といった内容が書かれていた。しかしながら、学生の中には彼らと同様に日誌意義理解は高く日誌意義実感は低いが日誌継続意欲が高い学生3名いた。彼ら3名と比較すると、たとえ実習中に日誌意義の実感が得られなくても、「日誌を続けることで書く能力も磨かれるだろう」「実習では担当の先生に正直に書くことができずに効果を感じにくかったが、自分だけしか読まないのであれば正直に書くことができ、日誌の効果を実感できるだろう」など、日誌の意義を実感できなかった原因を一時的なものだと考えていれば日誌継続意欲は高かった。まとめると、日誌意義理解は高くても、実習中にその意義をあまり実感できず、今後も変えることが非常に難しいと感じる「書くことそのものに対して感じる難しさ」に原因を帰属させていた場合は、日誌継続意欲は低かった。つまり、そもそも書くことに対して深刻な困難感を抱えている場合、教職課程の講義等を通して実践省察に日誌を利用する意義を理解したとしても、その後の日誌を用いた省察に対し、主体的には取り組まない可能性が示唆された。

つまり日誌を利用した省察がその本来の効果を発揮するには、講義等でその意義を理解させるだけでなく、そもそも日誌を書くことそのものに対する支援も必要である可能性が示唆された。そこで教員志望学生が日誌を利用する際に感じた「書くこと」に対する困難を整理したところ、「記述量が不十分、同じ内容を繰り返し書いてしまう」、「書いても問題が解決できない」といった点が浮上した。書くことに対する困難感を抱えている教員志望学生の日誌を検討したところ、彼らの記述には具体性がなく、さらに生徒の言動を捉える観点があまりに少ないため、記述量は少なく、日誌を作成し読み返しても問題解決につながるような手掛かりを得られないことが示唆された。

### 3) 日誌を読み返す介入の日誌記述の量と質に対する効果検証

2017年度までの研究成果をもとに、介入実験を行った。具体的には、教員志望学生28名を対象に、作成した日誌を読み返すことが、日誌の記述量や記述内容に及ぼす効果について検討した。

その結果、日誌を何度も読み返すように指示された学生たち(Re-reading群)も、日誌を読み返し自分の解釈や考えの根拠を再度説明するように指示された学生たち(Re-examining群)も、日誌の記述量が増加し、学生自身の認識にも変化があらわれた。さらに記述内容にも変化が見られた。前者(Re-reading群)では新しい情報や対応方法に関する記述が増え、後者(Re-examining群)では解釈やその根拠についての記述がより詳細化した。さらに実験後に提出された学生自身による感想の内容を整理したところ、上記の結果と同様のことが語られていた。

以上から、自身で作成した日誌を読み返すことが、日誌の記述の量と質、そして記述者本人の認識の変化に影響する可能性が示唆された。また日誌を読み返す介入方法については、教員志望学生のニーズに合わせて変える必要があることが示唆された。

### 4) 生徒逸脱行動を捉える観点への介入と対処効力感に対する効果検証

2017年度までの研究成果より、教員志望学生の自発的省察日誌継続意欲を低下させる重要な原因のひとつとして、「日誌に書いても問題が解決しない」といったことが示唆された。彼らの日誌には実践の様子と今後の対策が書かれているものの、問題場面に対する見方が浅く一面的であった。そして、そのことが日誌を書き読み返すことが問題解決の手立ての発見につながる要因のひとつだと考えられた。そこで教員志望学生が実習日誌に生徒逸脱行動とその対処を書くことに対する効果を実感し、さらに困難感を減らすため、問題場面(授業時の生徒逸脱行動場面)での生徒認知の多様性を育成する介入の実施とその効果の検証を行った。

### Results: quantity analysis

Activities (15 minutes)	1st version journal The mean of the character count	2nd version journal The mean of the character count
Re-reading (n=14)	248.46 (SD=82.07)	270.46 (SD=126.84)
Re-examining (n=14)	219.84 (SD=69.56)	271.30 (SD=74.87)

### Results: quality analysis

Activities	Example in the 1st version journal	Example in the 2nd version journal
Re-reading	.....student K was giving his presentation in a clear voice.....student Y wasn't listening to K .....	.....student K was giving his presentation in a <u>loud</u> and clear voice...student Y wasn't listening to K, <u>so I am going to have him put unnecessary items away from his desk</u> .....
Re-examining	.....in the next lesson, I am going to give more opportunities to have more students' say.....	.....In the lesson, <u>only presentators talked and other students didn't have opportunities to talk about their own opinions</u> , so, in the next lesson, <u>I am going to ask them to share their opinions about peer's presentations</u> .....

### Results: quality analysis

Activities (15 minutes)	Prospective teachers' self-reports about changes between the 1st version journal and the 2nd one
Re-reading (n=14)	Getting new information and ideas (7/14)
Re-examining (n=14)	Making prospective teachers' thoughts more detailed (9/14)

☑ The results were confirmed on the journal entries.

具体的には次のような手順で介入を行った。a)授業時の典型的な生徒逸脱行動場面に対して教員志望学生個人で生徒逸脱行動の原因を考える、b)ピアワークでお互いの考えを共有、c)同じ場面に対する生徒の言動の原因を再度教員志望学生自身で考える。

その結果、当初、教員志望学生は逸脱行動を示している生徒の快不快欲求(したい・したくない)に着目していた。しかしながら、ピアワークを通して、授業環境との相性(授業についていけないのでわからないからつまらないなど)そして学習以外の学生の状況(学生が携帯をずっとゲームをしているのは、ちょうど展開が盛り上がっていて終われない)、学習以外の学級内関係性希求(教師に注目してほしい、みんなでそうすると決めている)、社会家庭での事情(家族からの緊急メール)、発達の文脈(いけないことをやりたくなるお年頃、中2病、発達障害の可能性)といった空間的・時間的に広がりのある相互に関連する観点を獲得していた。さらにピアワーク後は新たな観点を増やすことはないものの、新しくピアワークで得た観点の中での解釈を増やしていた。またピアワークの前後で、逸脱行動への対処効力期待が有意に増加した。以上から、本プログラムは、実習前に、教員志望学生同士のピアワークにより、逸脱行動を捉える際の観点と記述量を増やし、さらに対処できるといった効力期待を高めることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoko Ichikawa, Yuko Fukaya
2. 発表標題 How do we encourage prospective teacher to improve the skill for writing a reflective journal effectively?
3. 学会等名 World association of Lesson Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko Ichikawa, Yuko Fukaya
2. 発表標題 Relationship between Preservice Teachers' Comprehension, Perception, and Motivation Regarding Journal Writing
3. 学会等名 EUROPEAN EDUCATIONAL RESEARCH ASSOCIATION (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川洋子 深谷優子
2. 発表標題 実習日誌における省察レベルと日誌継続意欲との関連
3. 学会等名 日本教師学学会第18回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 市川洋子 深谷優子
2. 発表標題 省察日誌の自発的継続利用に影響する要因の探索的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 日本発達心理学会第28回大会
2. 発表標題 授業時の生徒逸脱行動に対する教員志望学生の解釈および感情
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	深谷 優子  (Fukaya Yuko)  (00374877)	東北大学・教育学研究科・准教授    (11301)	